琉球大学学術リポジトリ

プロフェッサーオブザイヤーを受賞して

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学大学教育センター
	公開日: 2018-07-17
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 狩俣, 繁久, Karimata, Shigehisa
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/41366

プロフェッサーオブザイヤーを受賞して

「琉球語入門」担当　狩俣　繁久（法文学部）

学部、大学院の講義や卒論指導や修論指導などをふくむ教育活動、さまざまな大学の業務、科研などをふくむ研究活動、学会活動、まじめにこなすほど多忙きわまりない。十分な準備ができないまま講義にのぞむこともおおい。くわえて、「琉球語入門」は、自作のテキストを使用した試行錯誤の連続だったので、満足のいく講義はすくなかった。そんななかで、自分がプロフェッサーオブザイヤーをもらえるなんて想像だにしていなかった。しかし、今回受賞できたのは、受講生が私の講義の趣旨に理解をしめしてくれたおかげなのであろうと、すなおに喜びたい。

なぜ「ウチナーグチ入門」か

現在開講している「琉球語入門Ⅰ」「琉球語入門Ⅱ」は「ウチナーグチ入門（初級）Ⅰ」「ウチナーグチ入門（初級）Ⅱ」を改称したものである。その「ウチナーグチ入門（初級）ⅠⅡ」も「沖縄語概説」を改称したものである。2 度の改称は、琉球列島で話されてきた固有の言語である琉球方言が若い世代へ継承されず消滅の危機に瀕している現状にかんがみて、マイノリティの言語の教育をめざした講義が提供できないかとかんがえたためである。通常の語学教育を超えて、ローカルからグローバルをかんがえるきっかけをつくり、マイノリティの言語についてかんがえることによって言語の本質についての理解をすすめたいというねらいもあった。

「ウチナーグチ入門（初級）Ⅰ」は、沖縄文化に対する関心のたかまりもあって、つねに百人以上の学生が受講した。「ウチナーグチ入門（初級）Ⅱ」は、「ウチナーグチ入門（初級）Ⅰ」を受講した学生に限るという履修条件をつけた。週一回、しかも半期 15 回しか開講されない講義では受講生に十分な語学力を身につけさせることはできない。それは英語やドイツ語、中国語や韓国語と同じである。そこで前期、後期をとおして受講した学生に一定程度以上の力をつけたいとかんがえたのである。講義内容を深化させたいし、ゆくゆくは中級や上級のクラスを開講できたらとかんがえて、講義名にカッコつきで初級とした。

講義では、テキストを毎回作成して配布した。既存のテキストに満足できるものがなかったからである。ないのはテキストだけではなく、手頃な値段の、つかいやすい辞典もなかったし、文法書にいたっては 1 冊も存在しなかったし、今も存在しない。

キャッチフレーズ（目標）を「牧志公設市場のおばあちゃんとウチナーグチで買い物ができるようになるまで」とした。テキストは、文法を重視しながら、簡単な会話ができるよう工夫した。「1 課コトバは何をつたえるか」「2 課それはなんですか」「4 課その餅はいくらですか」「5 課それはなんという野菜ですか」「8 課それはどこの豆腐ですか」「9 課何をたべますか」「12 課北谷に行きます」「17 課何を食べたの」「20 課ニガウリは苦いです」等々。

「琉球語入門」への改称

しっかりとウチナーグチの力をつけさせるには、他の外国語科目のように週 2 回のクラスをすくなくとも 1 年間 60 回講義する必要がある。そのためには 60 課分のテキストが必要で、中級のクラスを 1 年間開講するにはさらに 60 課必要である。試行錯誤して 50 課ちかくまでテキストを試作したが、目標の半分も達成できないまま、2006 年度に「ウチナーグチ入門（初級）」から「琉球語入門」に改称した。

ウチナーグチは、沖縄島および周辺離島で話される方言の民間呼称である。沖縄県民の人口約 130 万人のうち、八重山諸島に 5 万人、宮古諸島に 5 万人が住んでいる。那覇方言、首里方言を中心にしたウチナーグチは、沖縄県内にあってマジョリティの言語であり、周辺の弱小の方言に影響をあたえている。日本全体の 1 パーセントの人

口しかないマイノリティの言語である琉球方言にもマジョリティとマイノリティがあるのである。方言では意思の疎通がはかれないほど言語差のおおきい弱小の方言が数おおくある。あまり知られていないが、琉球列島は多言語社会なのである。しかし、弱小方言ほど危機的な状況はいっそう深刻である。

ラジオやテレビのコマーシャルなどに使用される言語もウチナーグチであり、沖縄芝居や沖縄民謡の言語もウチナーグチである。首里方言の語彙を1万5千語掲載した『沖縄語辞典』もあるし、入門書もいろいろ出版されている。「沖縄語普及協議会」「うちなあぐち会」などの団体や講座もあちこちにある。そんな状況のなかで、琉球大学だからこそマイノリティのなかのマイノリティの言語の学習をめざした講義があってもよいのではないかとかんがえた。そこで、宮古諸島の方言、八重山諸島の方言、奄美諸島の方言など、どんな方言でもおしえることができる「琉球語入門」に改称したのである。

まずミャークフツ（宮古諸島の方言）をおしえることにした。受講生は激減した。予想どおりではあった。「ウチナーグチ入門」にもどせば、受講生はふえるかもしれない。需要と供給の原則に反するが、マイノリティの言語を指導する講義があってもよい。ミャークフツ入門のテキストを試作しては講義で実践し、少し改訂しては講義で使用した。沖縄島では生きたミャークフツを聞く機会はほとんどなく、ミャークフツのテープやビデオ教材などもないので、ミャークフツのシンガーソングライターの下地勇の CD を聞かせている。歌詞を解説し、そこにでてくる表現を応用した練習問題をつくった。

研究と教育と

講義で紹介するみじかいことわざにもさまざまな文法形式がみられる。下地勇の歌ともなると、1曲の歌詞にもたくさんの単語と、さまざまな文法形式がでてくる。単純な表現ばかりではない。しかし、まだ不明なことばかりなので、講義中に立ち往生することもしばしばである。

どんな小さな島の方言も固有の体系をもった言語であり、言語の機能という点で英語や日本語と同じである。簡単なあいさつや日常会話だけでなく、英語や中国語などの大言語と同じように、どんなに高度で複雑な考えも、微妙で繊細な感情も表現できるミャークフツの運用能力を身につけさせたい。

しかし、消滅に瀕するマイノリティ言語のおおくは、研究者もすくなく研究もおくれている。辞書も文法書もテキストもない。ミャークフツも例にもれず、特定の分野の、限定的なテーマの研究論文や調査資料はあるが、テキスト作成の参考となるものはほとんどない。もちろん受講生用の辞書も文法書もない。

いまもっとも優先すべきことは、母語話者が健在なうちに、できるだけおおくの調査と研究をすすめ、大量の資料を収集しておくことである。そして、その成果として辞書と文法書と整備されたテキストを用意することができるのである。

自分の生まれ育った土地の方言を自由に話せるようになりたい人、居住する土地の方言での会話を楽しみたい人、さまざまな表現活動をおこないたい人の希望をかなえる、あるいは、地元の人々の「言語権」を保障するには、限定したテーマにしぼった従来の研究ではダメである。できるだけ網羅的で詳細で総合的で体系的な研究が必要である。

共通教育の「琉球語入門」は、研究と教育をどうむすびつけるか、教育と乖離しない研究とはどのようなものか、大学での研究と教育がこの地域の未来とどうかかわるのかをおしえてくれた。受講生たちがそのことをすこしでも理解してくれたのであるならうれしい。そして、講義をとおしてマイノリティの言語の学習も可能であることもわかった。